

# 大平さんの二つ

佐々木良作

ちよつどあの日、私は、北海道遊説中でした。早朝、党本部から総理急逝の報を受け、そんなことはあり得ないことと、どうしても納得できずにいたのですが、やがて伊東官房長官から直接真実を伝える電話を受けねばなりませんでした。官房長官ご自身、前夜遅くまで病床の総理と話を交わされて帰宅され、それから数時間を出ずして急報で叩き起され、再び病院に駆けつけられたことなど知らされ、信すべからざる事実の疑いようのないことを思い知らされたのです。

私は愕然として、しばらく、うつろになつた自分の心を、うつろな自分の眼がじつと見つめているような状態に置かれました。今日は確か、午前中、北海道を走り回り、午後まっすぐ九州に飛び、東京に帰着するのは多分明日遅くなるはず、などと、私の意思を超えて決定されている自分の日程が、よそことのように浮かんで消える私の心の裏に、それを圧倒するように、政治家大平正芳氏の姿が、具体的な、また客観的な何ものをも伴わずに、ただ漠然と、入道雲のように拡がってきていました。

政治家の運命さだめはかなし五月闇 良素

大平さんの多くの追想のなかで、二つのふとしたことが、私には強く印象づけられています。何の時でしたが、小人数の会合のとき、私が、「あんだ、よく喰うなあ」と、彼の健啖振りに見とれながらつぶやくと、「丈夫なんだなあ」と応え、しばらくしてから「もっ、たいながり、やなのかな」と、つけ加えられました。さらに「大ぶくな

ら二つ三つは喰ってしまふよ」といい、「やっぱり丈夫なんだろう」と、もう一度つけ加えられたのでした。これはどうということはないのですが、いかにも大平さんらしくて私には忘れ難いのです。

もう一つ、現鈴木知事の都知事選のとき、この選挙には、竹入公明党委員長とともに数回、大平総理と街頭演説を一緒に一緒させられました。宣伝カーのマイクの前に立つ大平総理は、如何にも元氣瀧刺、びっくりするような大声を張りあげての演説は活気に満ち、楽しそうでさえありました。国会内での、例のアーウーや、口こもるような歯切れの悪さなどみじんもありませんでした。竹入さんをつつきながら、私が、いたすらっぱく「大平さん、調子いいね、国会でもこういう調子でゆきませんか」というと、あの首をすくめる大きなしぐさをしながら「青空の下がいいね、国会はにが手だよ」と苦笑されたものです。私どもには、この大平さんの苦笑の意味も、街頭演説の元気に満ちた調子の理由も、わかり過ぎるほどよくわかるのです。

しかし、今度の選挙（五十五年夏のダブル選挙）の初日、いつもの選挙の例のごとく、各党首それぞれ街宣車を駆って街頭に乗り出し、めいめい選挙第一声を放ったのですが、その有様がテレビに映し出されるのを見て、私は大平さんが少々異常と思われるほど力んでおられるように感じられてならなかったのです。

大平さんの元気に満ちた街頭演説振りは、私にもなじみ深いのですが、都知事選のときのような、大平さんらしい余裕がどうしても感じられないのです。それでも、それは政治家大平正芳氏の政治生命を賭けた乾坤一擲の大勝負だから当然なのだろうと思ひ、異常な緊張状態と見えた原因の一部に、肉体的変調があるうなどとは思ひ、それもみませんでした。後から考えてみると、いろんなことが思い当たるようにも考えられるものです。

壮烈としかいいようのない逝かれ方に想いを馳せ、もう一度政治家大平正芳という人物を想いつかべ、想いを深めずにはおられない思ひです。重ねてご冥福を祈り、拙いペンを置きます。

（衆議院議員・民社党委員長）